

# Physical Arts No.40

Society for Studies of Physical Arts

身体運動文化学会

会報第40号特別号

●令和4年6月5日●

編集発行

身体運動文化学会

会長 原 英喜

追悼

身体運動文化学会前会長

二杉 茂 先生



# 二杉 茂 先生

1947年大阪市生まれ。1971年天理大学体育学部体育学科卒業。1995年韓国成均館大学大学院体育学研究科修士課程修了（理学修士）。1998年韓国京畿大学大学院体育学研究科博士課程単位取得満期退学（理学博士）。神戸学院大学大学院人間文化学研究科教授兼、学際教育機構スポーツ・マネジメントユニット長を務める。関西学生バスケットボール連盟（常任）理事。日本学生バスケット連盟理事。天理大学男子バスケットボール部監督などを歴任。2022年2月8日逝去。

1993年に本学会の前身である身体運動文化研究会を立ち上げ、1996（平成8）年の身体運動文化学会の発足には理事長として貢献。2010年から2019年までの10年間会長を務め、学会の発展と後継者の育成に尽力した。享年74歳。

身体運動文化学会 役員組織		
名誉顧問	湯浅 泰雄	桜美林大学大学院教授（哲学・深層心理学・身体論）
	近藤 英男	奈良教育大学名誉教授（体育哲学）
会 長	高橋 進	目白大学学長（倫理学・比較思想・剣道）
副会長	江田 昌佑	鹿屋体育大学学長（運動学）
理事長	二杉 茂	神戸学院大学教授（体育社会学・スポーツコーチ学）
副理事長	佐藤 臣彦	筑波大学助教授（体育哲学）
理 事	会田 勝	鹿屋体育大学副学長（体育哲学）
	今村 裕行	中科学園大学講師（スポーツ生理学）
	入江 康平	筑波大学教授（武道史）
	小原 晃	目白大学教授（体育科教育学）
	川那部保明	筑波大学教授（仏文学）
	佐藤 成明	筑波大学教授（剣道コーチ学・体育心理学）
	高橋 健夫	筑波大学教授（体育科教育学）
	藤堂 良明	筑波大学助教授（武道史）
	丸山 敏秋	倫理研究所（東洋思想）
	丸山 克俊	東京理科大学助教授（スポーツ教育学）
	森 昭三	筑波大学副学長（健康教育学・学校保健学）
	保江 邦夫	ノートルダム清心女子大学教授（物理学）
	尹 南植	韓国・梨花女子大学（スポーツ測定評価論）
常任理事	加藤 純一	目白大学講師（武道論・生涯学習論）
	菊本 智之	常葉学園浜松大学講師（武道史）
	小林 寛	目白大学講師（東洋思想）
	酒井 利信	筑波大学助手（武道思想史・人類学）
	佐藤 貢悦	淑徳大学助教授（東洋思想）
	原 英喜	國學院大学助教授（運動文化）
	別府 淳夫	つくば国際大学教授（東洋思想）
	前林 清和	神戸学院大学助教授（武道思想史・身体論）
	横森 正彦	淑徳大学教授（英文学）
監 事	入江 康平	筑波大学教授（武道史）

身体運動文化学会発足時の役員組織（1996年）

## 二杉茂先生を偲んで

身体運動文化学会 会長 原 英喜

(國學院大學 人間開発学部 健康体育学科 教授)

二杉茂先生が2月8日にご逝去された連絡をいただきました。3年前に、会長職を引き継ぎましたが、まだまだ早い引退ではないかと思ひながらの交代でした。病気の治療に専念されるおつもりだったのかも知れませんが、この学会が創設される前の身体運動文化研究会を立ち上げられて、精力的に活動を押し進められて、1995年に筑波大学で開催された第2回身体運動文化研究会で初めてお目にかかったのではなかったかと思ひます。その会で記念講演をされた高橋進先生から誘っていただき、私も自然科学系の分野からの参加者が少ないからということで学会に参加させていただきました。その後、時を待たずに身体運動文化学会が創設され、1996年11月4日に筑波大学で身体運動文化学会第1回記念大会を開催、会長に高橋進先生、そして実行部隊である理事長に二杉茂先生が就任されて、学会の中心として発展する原動力となつて、前林清和先生、津田真一郎先生など神戸学院大学の先生や、筑波大学の酒井利信先生、加藤純一先生、菊本智之先生、大石純子先生方と活躍されてこられました。

学会大会を日本の東西で交互に開催する中、学会の牽引役の理事長として、或いは会長として責任を果たしてこられました。神戸学院大学では、本学会の第5回記念大会を「国際シンポジウム2000」と題して開催されました。創立15周年記念国際大会は「大学スポーツの在り方を環太平洋的視野から考える」と題して招致され、さらに、創立20周年記念国際大会のテーマは「スポーツ・フォー・オール」の未来」を掲げて、単なる年次大会ではなく国際色を打ち出して神戸学院大学で開催して、正に学会を牽引してこられました。引き継がれる志は、本年、前林清和先生の尽力で、第27回大会が神戸学院大学で開催されるとのことです。

学会誌には、1995年第2巻に「運動前複合アミノ酸投与が運動遂行に及ぼす効果」を、続く第3巻には「教育の質的向上の観点から見た1960-70年代の韓国学校体育」、さらに1999年発行の第6巻には「大学スポーツの日米比較—日本の大学スポーツには何が必要か—」と精力的に投稿され、研究者としての足跡を残されています。

バスケットボール界における二杉茂先生の存在も偉大なものがあつたと伺っています。門外漢の私には十分理解できていない部分なので、触れるのはおこがましいのですが、37歳にしてハワイ大学へも勉強に行かれ、そのことが前述の論文の日米比較に繋がっているのだと思ひます。国内での活躍は、関西だけにとどまらず、私が勤務していた國學院大學の渋谷キャンパスへも、バスケットボールの練習や試合で来られていて、正門前の横断歩道で声をかけていただけたことがありました。バスケットボールの指導者の一端を側聞すると、持てる人材を有効に活かし、それまでの典型的な戦術にとらわれず、独自の工夫をされてチームの発展に貢献され、一チームの実力向上だけに留まらず、日本のバスケットボール界にも影響を及ぼされたとのことだと思ひます。

「スポーツ学の視点」（1996年江田昌佑監修）を開くと、二杉先生と身体運動文化学会の設立や発展に寄与された先生方の執筆された文章が掲載されています。本学会が研究会から学会へと歩んだ創成期の力強さを感じずにはいられないものです。この本の第2章「人と社会・自然」の中で、二杉先生は「現代社会とスポーツ ―社会学的視点―」を担当されて、「・・・スポーツを「文化」として考える必要がある。・・・」と強調されていて、早くから学会の目指すところを認識されていたことを改めて実感いたしました。

二杉先生が醸成してくださったこの学会は、創設当時からのメンバーとその影響を受けた先生方によって受け継がれています。暖かい眼差しでこの学会を、そして日本の身体運動文化をいつまでも見守ってくださることと思います。心からご冥福をお祈り申し上げます。



身体運動文化学会第21回大会（2016年10月22日）  
天理大学体育学部キャンパス

# 二杉茂先生を想う

身体運動文化学会 副会長 前林 清和

(神戸学院大学 現代社会学部 教授)

本年2月8日に、本学会2代目会長を務められた二杉茂先生がご逝去されました。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

今年の2月13日に、ご自宅にお見舞いに行く約束をしていたのですが、8日に奥様からご逝去されたというお電話をいただきました。今振り返ると面倒を見て頂くばかりで、少しも恩返しができなかったことが、痛恨の極みです。

先生との思い出を振り返りつつ、先生の学会への思いを今一度かみしめて、その遺志を引き継ぎ、何をすべきかを確認することで哀悼の意を表したいと思います。

私は、1991年に神戸学院大学に勤めることになったのですが、その際にお世話になったのが、二杉先生です。私の就職のために、当時神戸学院大学の海外研究員としてハワイ大学に渡米されていたのにも関わらず、急遽、帰国され、ご尽力いただいたのです。着任してからは、当時まだ33歳だった私を可愛がってくださり、様々なことをご指導いただきました。それと同時に、体育、スポーツのあり方について、よく語り合いました。そのなかで、これからは体育やスポーツといった小さな枠のなかで研究するのではなく、人間が行う身体運動全般、つまり体育やスポーツ、武道、ダンス、芸能、祭などを一つの文化、つまり身体運動文化と捉えることで、今までに見えてこなかった世界がみえるのではないかと。また、文系や理系といった研究方法で学問分野をわけて研究するのではなく、身体運動文化を学際的に捉え、文理融合の学問として考えるべきである。というように、議論が深まり、様々な分野の研究者が一堂に会して研究する必要があるのではないかと、ということになりました。そして、その研鑽の場として身体運動文化研究会を創設することになったのです。また、二杉先生には研究会を立ち上げる際に、もう一つの目的がありました。それは、この研究会を若手研究者の討論の場、研究発表の場となるようなものにしようというものでした。1992年のことです。

事始めとして1993年に道和書院から『スポーツと健康』（身体運動文化研究会編）を上梓し、1994年3月に「身体運動文化研究」1-1（創刊号）を発刊したのです。そして、1994年10月に第1回身体運動文化研究会を神戸学院大学で開催しました。この順番自体が普通と逆で、二杉先生らしいところです。

さらに、1995年には、筑波大学の高橋進先生を会長に仰ぎ研究会から学会へと発展させて、身体運動文化学会第1回記念大会を筑波大学で開催しました。その後、国際会議なども開催しながら、今年で27回大会を迎えます。その大会が奇しくも二杉先生が長年務められた神戸学院大学で開催されます。

二杉先生は、いつもどっしり構えられ、何事も俯瞰的にみながら、先を見越してプランをたて、行動される人でした。また、同時に、後輩や学生の面倒見がよく、私も含めその時々若者を引き上げてくれました。

今まで、二杉先生の後姿を追いかけながら、様々な活動を行ってきました。学会とは直接関係ありませんが、神戸学院大学における体育・スポーツ分野の専門教育としての立ち上げや組織改革なども先生と一緒に行ってきました。

本年の7月から会長に就任しますが、二杉先生の遺志を引き継ぎ、身体運動文化の醸成と学会の発展のために尽力していかなければと思いを新たにしています。特に、若手研究者がのびのびと研究できるような場にしていきたいと思えます。そのことが、少しでも二杉先生への恩返しになるでしょうし、また先生が一番喜ばれることだと思えます。

最後に、二杉先生、本当にありがとうございました。

合掌



身体運動文化学会第22回大会（2017年12月9日）  
筑波大学 筑波キャンパス

# 二杉茂先生を偲んで

身体運動文化学会 理事長 酒井 利信

(筑波大学 体育系 教授)

身体運動文化学会の生みの親であり、本学会をここまで育て発展させてきた最大の功労者である、二杉茂先生がお亡くなりになった。あまりにも早く、後進の者としてもっと教えていただきたいことは沢山あった。

直接お電話で大病をされていることを伺い、それからおよそ一年余り、家内に二杉先生に会いに行くと行って言っていた矢先の訃報であった。二杉先生の愛弟子である伊藤淳先生からご連絡をいただいた時には、なぜもっと早くに会いに行かなかったのかと悔いたが、今はこれで良かったとも思っている。

二杉先生と初めてお会いした時のことは、正直、あまり覚えていない。おそらく本学会の前身である身体運動文化研究会の活動開始に際し、前林清和先生を介してお会いしたと思う。当時の記憶がここまで薄れてしまうほど、その後の二杉先生との思い出は強烈であり、濃いものである。想えば本当に随分と可愛がっていただいた。

お人柄は皆さんご存じの通りであり、紳士然と気取ったようなところは全くなく、正反対で、一言でいえば型破りな方であり、破天荒という言葉が最もふさわしいかと思う。また、人間の器ということでは、この人以上の人物を見たことがない。

こういったお人柄に関する思い出はいくつもある。

関西弁で「酒井君、いつでも神戸に遊びに来いや」とよく誘っていただき、ゴールドのメルセデス・ベンツで色んなところに連れて行ってもらった。狭い道で、この先車が引き返せないのではないかとと言うと、「行ったらええねん。生き方と一緒にや！」と言ってどンドン進む。今まで見たことのない、一緒にいてワクワクする先生だった。

1997年の夏であったと思うが、私が結婚して間もなくの頃、家内と一緒に韓国に連れて行ってもらったこともある。二杉先生が中心となるプロジェクトでの渡航であったようだが、一緒に行こうといわれて訳も分からず付いて行ったものの、ソウルに着くなり「新婚さんや、二人でサイト・シーイングでもしてきいや」と言われ、結局、別行動させていただき、期間中、先生方が仕事をしているのをよそ眼に二人で遊ばせていただいたこともある。こういった方法で、学会事務局をやっていた私を労っていただいたのだと思う。

当時、本務校でも大暴れされていたようで、詳細はわからないが、「毎日が戦いや。大変やで！」と楽しそうに言われていたのを昨日のこのように覚えている。

この手の話、思い出は沢山あるが、私にとって何より印象深く、そしてその後、二杉先生のお人柄に傾倒していったのは、身体運動文化学会立ち上げの際のことである。1996年、ご自身は一步退いて、初代会長として高橋進先生をお迎えし、第1回記念大会と発足祝賀会を筑波大学で開催した。私は当時筑波大学の助手をしていたが、その準備の多くを任せていただいた。今思えば若気の至りで随分前のめりに勝手なことを思いつくままにやろうとしていたが、先生に相談すると「何でも思うようにやったらええねん。責任はこっちで取るから」といつもこう言っていただいた。私は当時30代前半で、世の中のことは

何も分かっていない若造であったが、今振り返れば随分守っていただき、育てていただいたと思う。この時の経験は私の人生の中で間違いなく大変に貴重であり、感謝の念に堪えない。現在、私自身が当時の二杉先生の歳をはるかに越え、こういった器の大きい人の育て方が出来ているかという点と全く敵わない。今になって有り難さをひしひしと感じている。

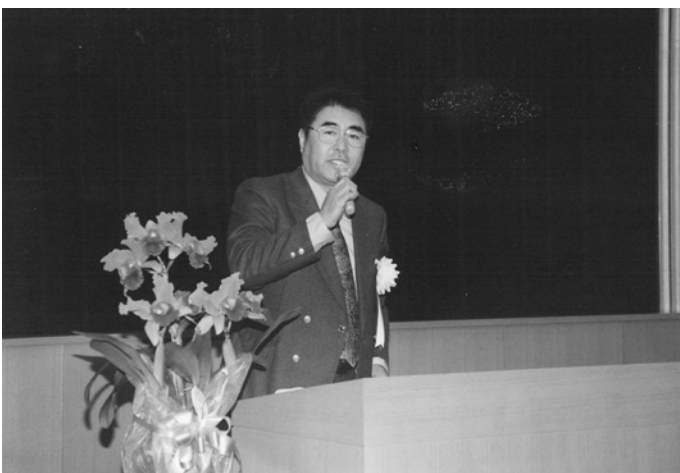
追悼号に相応しい文体かどうか顧みることなく思うままに二杉先生との思い出を綴ってきたが、今、先生への思いは感謝しかない。

私の中の二杉先生は、破天荒でハチャメチャなあの時のままである。そしてこれからも私の心の中ではそうあり続け、天界から激励し続けてくださると思っている。とても生き方を真似できないが、先生が残してくださったこの学会を大切に、発展させていくことで少しでも恩返しができるかなと思っている。

二杉茂先生のご冥福をお祈り申し上げる次第である。



身体運動文化学会 発足祝賀会（1996年11月4日）  
筑波大学 右から二杉 茂先生、森 照三先生、高橋 進会長



第2回身体運動文化学会（1997年11月1日）  
目白大学



韓国・ソウルにて（1997年6月）  
左二杉先生



# ハワイの風

## 身体運動文化学会 前事務局長 津田 真一郎

(神戸学院大学共通教育センター スポーツサイエンス・ユニット 教授)

二杉先生が他界されてからおよそ3ヶ月が経ちましたが、正直なところ、未だに現実感がありません。私にとって先生は大先輩であり、恩師、上司であり、友人や兄、父親のような存在でもありました。

先生との出会いは23年前にさかのぼります。当時、私は米国インディアナ大学大学院でコーチング科学を学んだ後、母校の天理大学で飛込競技部監督および日本代表監督を務めておられた故森井博之先生の計らいで、天理大学のアシスタントコーチと非常勤講師に就任したところでした。その際、同じく非常勤講師として神戸学院大学から出講され、バスケットボール部の監督を務めておられた二杉先生とお会いしたのが初めてだと記憶しています。

二杉先生も米国ハワイ大学でバスケットボール部のアシスタントコーチをされていたこともあり、日米の大学スポーツシステムの違いやコーチングの話題で意気投合したことを思い出します。当時の私は薄給ながら結婚もし、幼い子供もいたため、先生が心配され、あちこちの大学の非常勤講師の職を紹介してくださいました。今では考えられませんが、多い時には5大学、週20クラス近くを担当していたこともあり、現在、専任教員として教鞭をとっている神戸学院大学もその内の一つでした。授業後には、毎週のように食事に誘っていただき、日本のスポーツ界の現状や大学スポーツの問題点について語り合う機会を設けていただきました。

当時、先生が身体運動文化学会の役員を務めておられたことから、2000年に開催された国際大会の研究発表とインディアナ大学時代の恩師のシンポジストとしての招聘を打診され、当学会に入会させていただきました。広くジャンルにとらわれず、若手研究者に発表の機会を与えることを主な趣旨とされているということに共感を得たことを覚えています。その後、神戸学院大学大学院にて博士後期課程をご担当されていたこともあり、将来に向けて博士の学位取得を強く勧められ、先生の講座の最初で最後の学位取得者となることができました。

2007年には、二杉先生をユニット長とした2年次からスポーツを副専攻とするスポーツマネジメントユニットのコースが神戸学院大学で開設され、専任教員として採用していただきました。以降、学会長に就任された先生の勧めもあり、微力ながら身体運動文化学会事務局と複数の国際大会および年次大会の事務局を務めさせていただき、多くの学会員との交流の機会を得ることができました。

先生は70歳の定年退職以降も、母校の天理大学のバスケットボール部の指導を継続され、最近ではコロナ禍の中、他界される半年前まで病気と戦いながらベンチに入って指揮をとられていました。その姿勢には鬼気迫るものがあり、先生の生き様の真骨頂を見せていただいた気がします。最後まで本気で指導者としての復帰を目指しておられたようです。

また、その頃に先生が推薦する私の専門でもあるスポーツ心理学関連の洋書の翻訳（共訳）本の出版を勧められました。素晴らしい内容の書籍でしたが、ここ数年、私の体調が好ましくなかったこともあり、あまり気が進みませんでした。なんとかやり遂げることができました。今思えば、怠け癖のある私を案じて最後までご指導いただいたような気がします。

明治から昭和初期にかけて活躍した政治家、後藤新平の名言に「財を遺すは下、仕事を遺すは中、人を遺すを上とする」という言葉がありますが、先生はまさに教育者、指導者として「人」を遺された方ではないかと思えます。多くの人が先生の人柄に魅了され、長年のスポーツや教育を通じた指導により薫陶を受け、貴重な人材としてさまざまな分野に巣立っていったことは容易に想像することができます。

先生が発案、担当され、現在でも私が引き継いで実施している神戸学院大学の授業に「海外実習」があります。毎年約1週間の期間でハワイ大学にて異文化を体験し、米国の大学スポーツシステムを学ぶという私がもっともやりがいを感じている授業ですが、コロナ禍直前の2020年の2月には、既に退職されていた二杉先生にも合流していただきました。その際に宿泊されていた路地裏のホテルのベランダで、「ハワイでは夕方になると必ずこんな涼しい風が吹く。こうやって地元の子供がボール遊びをするのを見ながら、ビールを飲みながら過ごすのが一番幸せな時間なんや」と語られたのがとても印象的でした。

二杉先生にはいくら感謝しても足りませんが、先生のレガシーを少しでも引き継ぐことで、恩返しができるのではないかと感じています。ハワイの風を感じながら、先生が安らかな眠りにつかれることを願います。

最後までご指導いただきありがとうございました。



海外実習（ハワイ大学マノア校）神戸学院大学ユニット学生2期生と（2008年）

中央1列目筆者 左二杉先生 上ロイド博士

## 二杉茂先生を偲んで

身体運動文化学会 理事 伊藤 淳

(流通科学大学経済学部 准教授)

二杉茂先生が、病に冒されていると初めてお聞きしたのは、2020年の夏頃でした。先生は非常にエネルギーギッシュでパワーに満ち溢れている方でしたので、「何で、先生が」という思いしかありませんでした。しかし、先生は「絶対に治したる！」と常に前向きなお気持ちでした。そのお気持ち通り、最先端の治療を続けながらバスケットボールのご指導を続けられましたが、病の進行を止めることができず、2022年2月8日、ご逝去されました。

二杉先生は、研究者として多くの業績を残され、また、バスケットボールの指導者としても多くの功績を残されました。先生は1976年から天理大学男子バスケットボール部の指導を始められました。その後、1990年ハワイ大学客員研究員として渡米され、1995年から再び指導いただくことになりました。私はその時天理大学3年次であり、お亡くなりになるまでの27年間、バスケットボールと研究、教育について多くのご教導をいただきました。私は、先生の下でアシスタントコーチとしてバスケットボールを学ばせていただきましたので、それらの思い出を振り返り、追悼させていただきます。

先生がご指導されたバスケットボールの戦術は非常に独特であり、「ディレイ・オフENS」と呼ばれるものでした。それは、シュートを打つまでの24秒間を決められた動きをしながらぎりぎりまで使い、シュートを打つという戦術であり、ハワイ大学で学ばれたようです。このような戦術を採用しているチームは日本ではほとんどなく、1997年にインカレ出場した際、関東4位の拓殖大学を71対66の僅差で破るという大金星を挙げました。先生のご指導の賜物で、インカレ出場は23回を数え、最高第3位の成績は天理大学の規模を考えると驚異的なものだと思います。このような戦術に対して「選手をロボット化している」というコーチもいましたが、二杉先生は「ロボット化というのは、選手の人間性を尊重せずにコーチがリモコンで操作するもので、選手は考えることができない。選手との信頼関係が構築され、その戦術を採用する意図を理解しているのであれば、選手は自主性を持ち、考えて行動するようになる。そして、自ずとチームへ誇りを持つようになる。」と話されました。そのお言葉通り、先生と私たちの間には強い信頼関係が生まれ、天理大学というチームと二杉バスケットへ高い誇りを持つようになりました。

先生は試合に勝つことを目的としていましたが、それ以上に「選手を大切にし、尊重して育てる」ということも大切にしておられました。このお考えは、選手との接し方に如実に表れていました。先生の練習は非常に厳しく、妥協を許さないものでしたが、練習が終わるとどの選手とも冗談を交えながら、フランクに話しをされました。そして、そのコミュニケーションの中から選手の考えを引き出し、信頼関係を構築し、二杉バスケットを浸透させたように思います。その会話では、「当たり前になったらあかん」ということを良く言われました。そのことを先生にお尋ねすると、「コーチは選手たちを勝たせてやるのが大切やけど、選手の人間性を高めさせないとあかん。勝った、負けた、上手い、下手だけではなく、バスケットボールを通じて、謙虚さや感謝することを身につけて欲しい。それを忘れると、やってもらって当たり前になってしまう。だから、上手くなったり、チームが強くなったとしても偉そうにしたり、傲慢な

態度をとるのではなく、恩返しをしたり、上手くできない人を助けないといけない。それが社会に出たときに大切になることや。そしたら、周りから信頼されたり、尊敬されたり、困ったときに助けてくれるんや。」とその真意をお話しくださいました。先生の練習時間は1時間半から2時間程度で非常に短いものでした。それ以外は、「自分で考えてやっつけ」と一見すると放任主義のようですが、このような先生のお考えが浸透していたからこそ、何をすべきなのかを自らが考え、自主的に取り組み、その結果、先生が望むような人間性を持った選手が育ったのだと感じております。

二杉先生は40年間の長きにわたり、ボランティアで天理大学の指導を続けられました。それは天理大学へのご恩返しと、何よりバスケットボールが好きであるということが根底にあるように思います。先生のエネルギッシュなご指導やジョークを言いながら笑っている顔などは鮮明に頭に浮かびますし、「伊藤、勉強せーよ！」と何遍も言われた言葉が聞こえてきますが、先生の教を胸に斯道を邁進していこうと思います。また、「伊藤、ええ人と出会えよ！」とも良く言われました。私にとって、先生とお会いでき、ご指導頂いたことが、最高のええ人との出会いであり宝物です。

先生、本当にありがとうございました。二杉茂先生に心からの感謝とお礼を申し述べると共に、謹んでご冥福をお祈り申し上げて追悼とさせていただきます。



身体運動文化学会第22回大会（2017年12月9日）

筑波大学 筑波キャンパス

### 故 二杉茂先生の追悼号の刊行にあたって

本学会前会長の二杉茂先生におかれましては令和4年2月8日に逝去（享年74歳）されました。先生は本学会創設を発案され、発足後は理事長、会長の職を務められるなど、四半世紀にわたり本会の運営・発展に多大なるご尽力をいただきました。

この度、当学会では、「追悼 身体運動文化学会前会長二杉茂先生」というタイトルの会報特別号を企画させていただき、関わりの深い先生に追悼文をご執筆いただきました。二杉茂先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

2022年6月5日  
身体運動文化学会広報委員会